



story part.

01・共犯の関係

SE1 ..学校の廊下の環境音

【頭から最後まで流す】

【0ー3秒ほどまで流してSE2と重ねる】

【ごく小さな音で、トラック終了までずっと流す】

クラウディアが白鹿女学院にやつて来て、最初の夏のある日。

クラウディア、プール授業に出たくない、なんとか逃げようとしている。

しかし、堂々とさぼる度胸はなく、かと言つて、腹をくくつて授業に行く勇気もない。

プールに入りたくない理由は、体型をからかわれるから。

クラウディアは昔から他の子よりも成長が早く、胸も大きい。

そのため、ただでさえ普段からセクハラを受けがちなのに、水着になると体型がはつきりわかる。結果、さらに注目されるので、昔から悩みの種なのである。

クラウディアはからかいのネタになるくらいなら、胸なんてない方がいいと思つてゐる。

目立つし、着られる服も限られるし、他人に性的な目で見られるのは不快でたまらない。なのに、気が弱いせいで、嫌な事を言われても笑って受け流すしかできない。

そんな自分が嫌になり、さらに落ち込む。ずっとこれを繰り返してきた。

……そして、今日もそうなる気がする。

だから、逃げたい。

だが、体育教師にこれを打ち明けたところで、さぼらせてもらえるとは到底思えない。よつて、あきらめるしかないのだが、やっぱり行きたくない。

せめて、仲のいい友人がいれば違うのだろう。

だが、クラウディアはいまだにクラスになじめず、独りぼっちなのだった。

どうして自分はこんなに無力なのだろう……。

そう思いながら人気のない階段に隠れていると、そこに主人公がやってくる。

S E 2 ..主人公の足音

[S E 3、5と同じ音]

[頭から流す]

[0—5秒ほどまで流して止まる。その後セリフ】

（主人公）

「あれ？ 橘さん？」

【驚いてびくつとする。少し怯えた声で】

あ、先生……」

クラウディア、主人公に見つかり『ああ、終わった。早く授業に行けと叱られる』と感じる。下の階からやつてきた主人公を、暗い表情で見下るす。

クラウディアと主人公の接点はほとんどない。国語の授業で会うくらいである。

主人公は新任で若く、性格も親しみやすい。なので、生徒たちからは比較的人気がある。しかし、クラウディアとしては、そのせいで、かえって近寄りがたい。

主人公の事を『自分とは別世界に住む、明るい先生』だと思つてゐる。

一方、主人公は、どうしてこんなところにクラウディアがいるのかわからず、不思議に思つてゐる。

ただ、クラウディアのクラスと、自分の副担任のクラスは体育が合同である。その体育は、次の時間のはずなのだが……。となると、ここにいる理由は何となく見えてきた。

だが、何せ新任なので、生徒との距離感がうまくつかめない。とりあえず質問してみる。

SE3 .. 主人公の足音

【SE2、5と同じ音】

【途中から流す】

【6—8秒ほどまで流して止まる。その後セリフ】

〈主人公〉

「次つて、プール授業じやなかつた？」

「暗い声で気まずそうに】

「はい。そうです。これから、プールです。……もう、みんな着替えてると思います」

〈主人公〉

「そろそろ、チャイム鳴りそうだよ……？」

「さらに声が暗くなる】

「そう、ですよね。」

【あきらめたように】

すみません。もう行きます」

主人公、このまま自分が鈍感なふりをしていれば、クラウディアは授業に行くだろうと
考える。

だが、そんなことはできない。

クラウディアが、今にも泣き出しそうな顔をしていたからである。

〈主人公〉

「あ……待つて！」

〔驚く。なぜ呼び止められるのかわからない〕

えっ？」

〈主人公〉

「どうしたの？ 話を聞くよ」

しばらく間。

「【困惑して。主人公に本音を打ち明けていいのか測りかねている】
えっと……」

〈主人公〉

「勘違いだつたらごめんね。でも、なんだか行きたくなさそうに見えたから……」

S E 4 : チャイムが鳴る音

【頭から、終わりまで流す】

【ごく小さな音で、0—5秒ほどまでの、最初の『キーンコーンカーンコーン』まで流して、
その後セリフと重ねる。】

【セリフと重なる時に、邪魔にならない音量に下げる】

クラウディア、チャイムの鳴る音を聞いて、ハツと顔を上げる。

だが主人公は『授業に行け』とは言わない。

こちらを心配そうに見上げて、クラウディアの言葉を待っている。

クラウディア、逡巡したのち『この人なら信用してもいいのかもしれない』と思いつめる。

完全にチャイムが鳴り終わってから、おずおずと話し始める。

「その……嫌なんです、プール。水着に、なるのが。

【少し間をあけてから。声が小さくなる】

私の身体。

【泣きそうな声になる。『胸が大きいねってからかわれるんです。それがすごく嫌なんです』と言いたいが、言えない】

目立つ。みたいなので……」

クラウディア、主人公に本音を伝えたものの、自意識過剰だと思われるのがつらい。

同性間のセクハラは、セクハラと認識されない事が多い。

『同性なのだから、少しくらい許されるだろう』という雰囲気がある。

クラウディアの経験としては、むしろ同性の方が、タチが悪い事が多いのだが、それはなかなか伝わらない。

大人に相談しても『女性同士なのだから気にするな』と言われる事もあった。だから、今回もそう言われる前にこの場を立ち去ろうとする。

〈主人公〉

「……そつか」

〔〔わざと明るい声を出す〕〕

でも、出ないと補講になっちゃいますよね。だからやつぱり」

対する主人公、クラウディアを励ます言葉を探している。

しかし『みんな橘さんがスタイル抜群で羨ましいんだよ』『橘さんは素敵なんだから、
気にする事はないんだよ』といった、つまらないものしか出てこない。

『そもそも、そういう事、本人は言われたところで全然嬉しくないんだよね。橘さんは
自分の体型を、長所とは思えないんだろうから……』と考える。

その結果、とりあえず、先生として正しい選択は捨てる。
『自分だつたらこうしてほしい方』を選ぶ。

〈主人公〉

「よし。補講になろう。サボっちゃえ」

「えつ？」

〈主人公〉

「体育の先生にはわたしが言つておくよ。

『橘さんは体調を崩してしまったので、保健室に連れて行きました』って。わたしが言えば、サボりだとは思われにくいくと思う。

辛い時は逃げていいし、我慢なんてしなくていいんだよ。そうしない?」

【正直、とても嬉しいが、先生に嘘をつかせるのは申し訳ない】

いいんですか……? でも

主人公、クラウディアの言葉を待たずに続ける。

〈主人公〉

「そしたら橘さんの言う通り、補講を受ける事になると思うけど。

一緒に補講になる子つて、きっと『お化粧が落ちるのが嫌』とか『水着になりたくないで逃げてた』とか。橘さんと近い気持ちの子が多いでしょう?

そもそも基本的にプールに消極的だった子の集まりなら、はしゃいだり騒いだりとかもなくて、淡々と済ませそuddash;。普通の授業より、居やすいと思う。

……これならどうかな？ 出られそう？」

クラウディア、嬉しくて、ホツとして、泣きそうになる。まさか、こんなことになるとは思っていなかつた。

「【感激して】

はい……！

【涙声で。思わず涙が出てしまう】

あっ……。ごめんなさい。なんかホツとしちやつて……。

【少し間をあけて。涙をぬぐつてから話す】

先生は、優しいんですね……。

私、怒られるんだとばかり思つてました。

【過去に言われた事を思い出している】

『そんな理由でサボるな』『自意識過剰だ』つて……。

でも違いました。見つかったのが先生で良かった……。

〈主人公〉

「正直、気持ちはわかるよ。

わたしも学生時代、プールが嫌でしようがなかつたもん。
周りが楽しそうにしてると、余計疎外感を感じるっていうか」

主人公は『さえないオタクにはプール授業はつらくって』という意味合いで話している。
しかしクラウディアは主人公を『学生時代からクラスの中心だつたに違いない』と誤解
しているので、ピンと来ていない。

単純に『プールが嫌いなのかな?』と思つていてる。

「【ここから声が明るくなる】

「 そ う な ん で す か ? あ り が と う ご き い ま す 。

「 私 、 先 生 の お つ し や る 通 り に し よ う と 思 い ま す 。

「 確 か に 、 補 講 な ら 参 加 す る 子 も 少 な い で す し 。 か ら か わ れ る 事 も な い 、 と 思 い ま す 。

【少しだけ話をあけてから】

「 先 生 。 話 を 聞 い て 下 さ つ て あ り が と う ご き い ま し た 。

「 私 。 今 、 嘘 を つ い て 休 も う と し て る の に 、 す ご く 安 心 し て ま す 」

「主人公」

「 そ れ に 、 一 人 じ ゃ な い か ら ね ! 嘘 を つ こ う と し て る の は わ た し も 同 じ ! 」

「【】の『ふふ』は落ち着いた感じで。この後の二回目の『ふふ』と差異をつける
ふふ。そうでした。先生も一緒に、嘘をついてくれるんですね」

〈主人公〉

「そういう事。つまり、わたしたち、共犯だよ」

「意外な言葉が出たのでキヨトンとする

『共犯』？

【初めて笑う】
ふふっ。嬉しいです……」

クラウディア、入学以来、初めてと言つていいほどの笑顔になる。
しかし、主人公はそれを知らない。『笑った！ やつたあ！』くらいにしか思っていない。
当然、クラウディアが、すごく美少女であるという事にも気づいていない。
確かに顔立ちは際立つて可愛いと思うが、特別な感情は抱かない。
主人公にとって、生徒達は等しくかわいい。
なので、ただ『生徒の力になれた！ 嬉しい！』と思つている。

〈主人公〉

「じゃあ、保健室まで一緒に行こうか。

わたしは、次の時間授業ないから。ゆっくりでも大丈夫だよ」

「【とても嬉しそうに】

はい……！ 一緒に行きましょう。

【少し間をあけてから】

そういえば私、保健室に行くのは初めてです。

ふふ。今日は初めての事が、たくさんです……』

S E 5 ..二人の足音

【S E 3、5と同じ音】

【途中から流す】

【15秒から流して、その後20秒地点くらいでフェードアウトして終了】

このままフェードアウトして終了。